

# 郷土あかし

第36号

発行 五日市郷土館 東京都あきる野市五日市920-1 電話 042-596-4069

## 多摩の養蚕 ～その発展を支えた成進社と風穴蚕種～

坂上 洋之 (元あきる野市文化財保護審議会委員)

### はじめに

安政6年(1859)6月横浜が開港されました。人々は何が売れるかわからないので、いろいろな品物を店に並べた中で、当初から爆発的に売れたのが生糸と蚕種でした。茶もよく売れました。当時、欧州の養蚕業が微粒子病の蔓延で壊滅的な打撃を受け、生糸や蚕種の生産が無に等しい状況の中での開港だったからでした。

以後、明治・大正・昭和の第二次世界大戦前まで、養蚕は主要な生産業として日本の近代化、富国強兵を支える経済基盤の一つとなります。特に西多摩地域は水田に恵まれず畑作が主でしたから、桑を植え蚕を飼う農家が多く、以下そうした盛況を支えた状況の一側面を見ていこうと思います。

### 1 下田伊左衛門と成進社

多摩の養蚕業を語る時、下田と成進社を除外する訳にはいきません。幕末安政2年(1855)、羽村の小作に生まれた下田は、開国後ブームとなった長野・群馬・埼玉など近県の蚕業隆盛を目の当たりにして、地元養蚕業のさらなる育成を志し、明治10年(1877)頃よりおよそ10年間、養蚕先進地域や先覚的な養蚕家への数度にわたる巡遊・視察を繰り返して彼自身の知識・技術の向上習得に努めました。

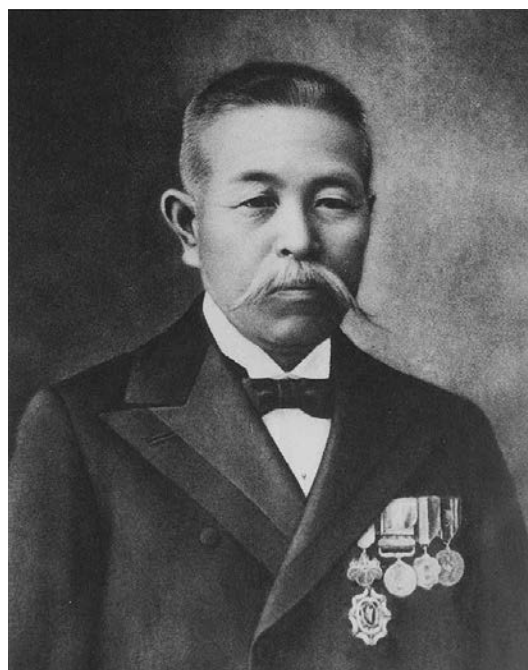
羽村村内には江戸時代に玉川上水元羽村堰の水番人を務めてきた指田茂十郎等の先達もいて、巡遊に同道することもありました。

その中で、下田が習得したのが奥州梁川地方(福島県)で行われていた温暖育による飼育法、上州(群馬県)島村の田島弥三郎から習得した顕微鏡に

よる蚕病検査法などでした。年齢からいうと22歳から32歳にかけての頃です。

恐らくこの巡遊・視察時代の下田の心の中には、生糸や蚕種輸出の増大に伴う産業先進地の繁栄・活況に比べ、地元羽村や多摩地方の貧しさや蚕業の遅れを痛切に感じるものがあったと思われます。それ故に、このような先進技術・方法の導入こそ地元活性化・繁栄に結びつくこと確信したに違いありません。

このような経緯を経て、下田は明治20年(1887)1月に私立蚕病検査法講習所を開設し、同8月に宗寿館蚕業試験場、11月には微粒子病検査法講習所を設置しました。



成進社社長 下田伊左衛門  
安政3年(1856)～大正4年(1915)  
(羽村市郷土博物館提供)